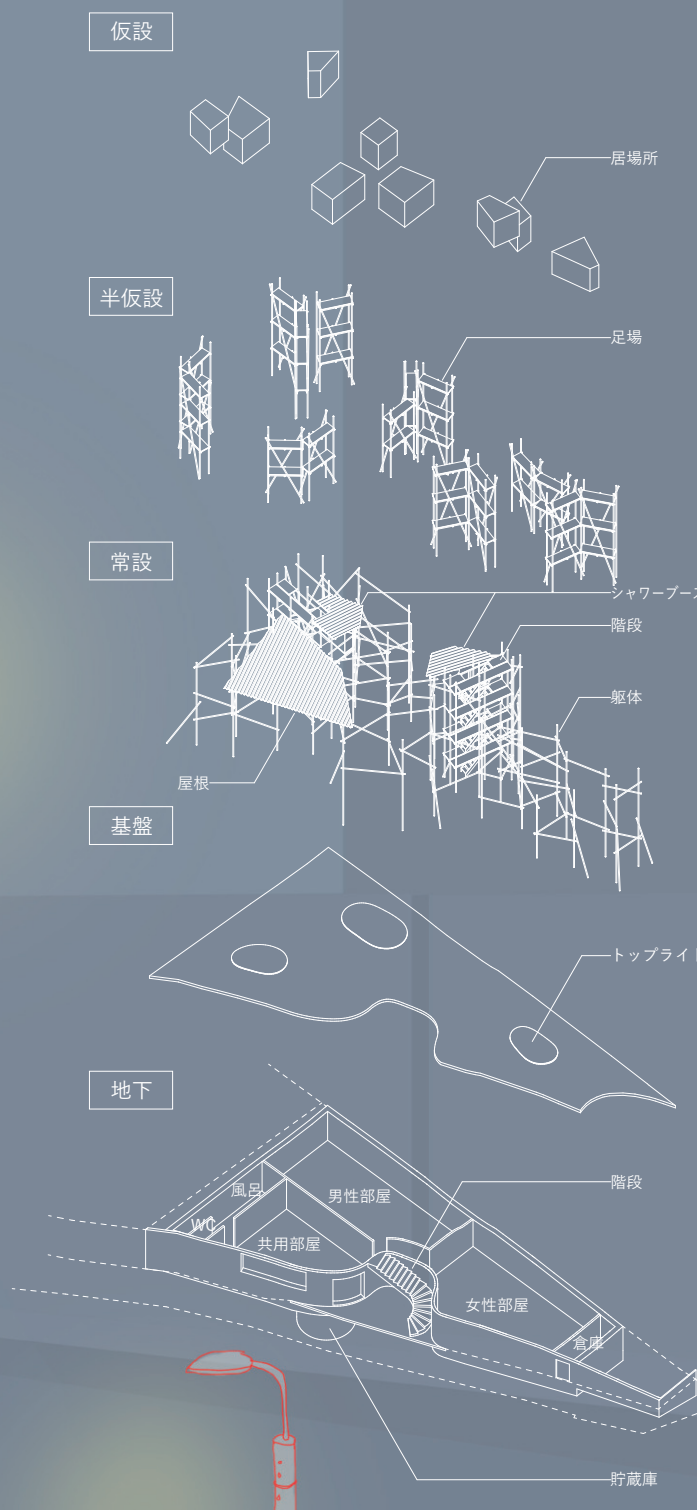
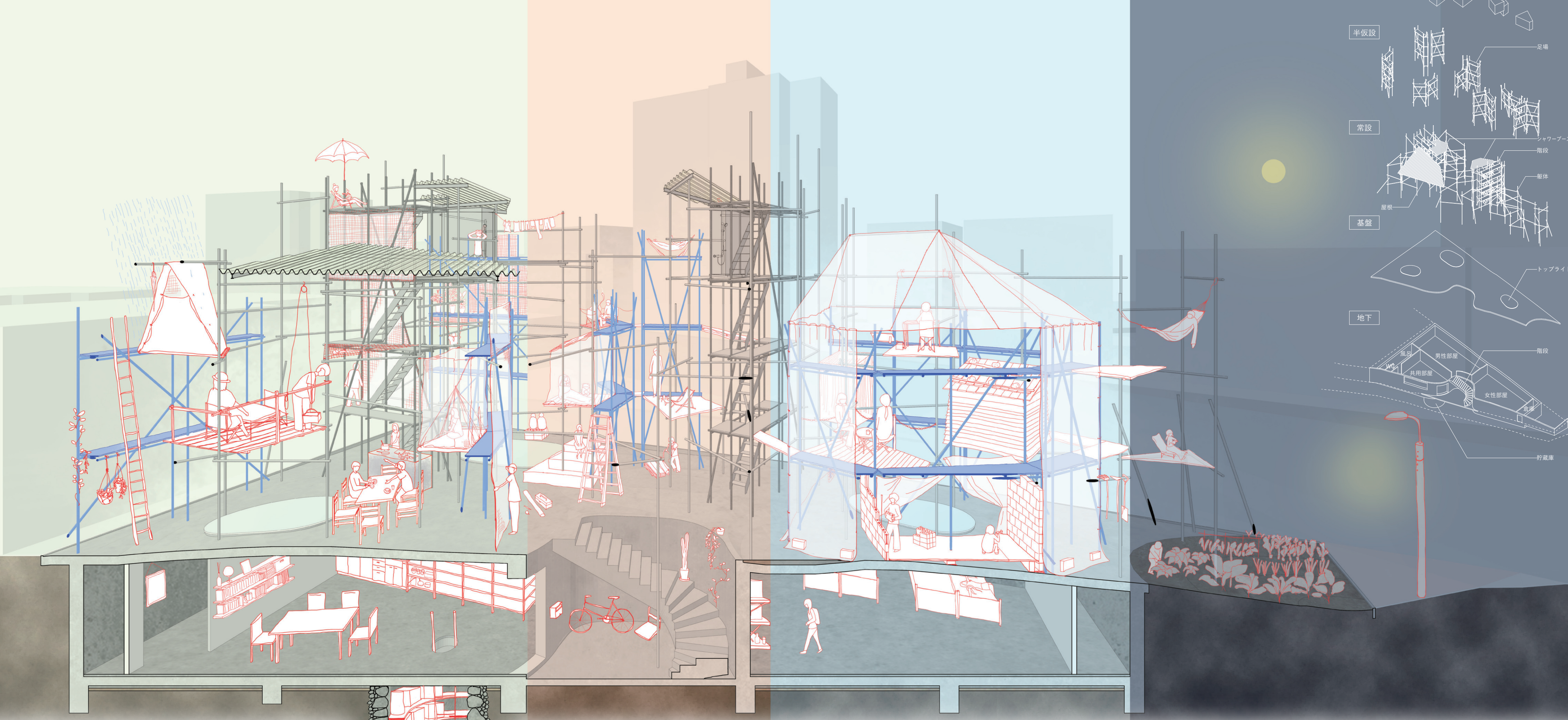
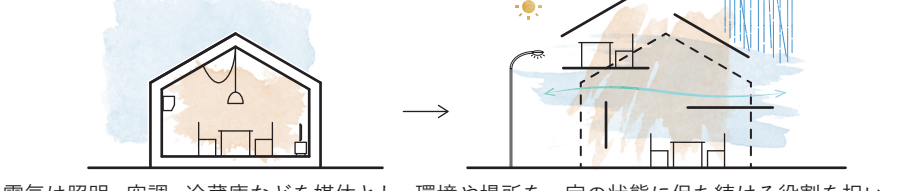


遊居 - 不安定の中を移ろう -

電気は環境を安定させる役割を持ち、それゆえに建築や生活の中に境界をつくり、場所を固定化してきた。電気を使わない家では、そのような固定的な空間や仕組み、内外の境界、人と人の境界を解体して生まれる不安定の中に身を置き、状況を楽しむように自らの居場所をつくる。その時々の変化に合わせて多動的に暮らすことは電気を使わないことで可能になる新たな生活様式となる。



1. 多動的な生活への転換

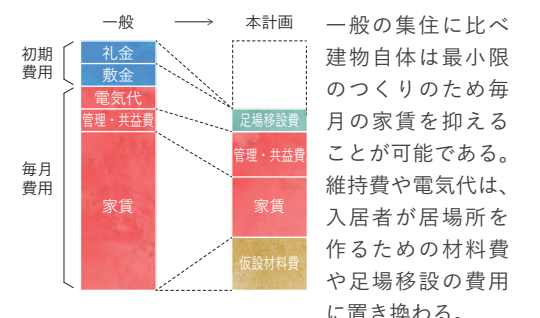


電気は照明、空調、冷蔵庫などを媒体とし、環境や場所を一定の状態に保ち続ける役割を担い、建築もまた閉じた内部をつくることで、外部環境の影響を受けにくい安定した空間を提供してきた。電気からの脱却はそのような安定した環境を解体し、内側と外側で変化する不安定の中で多動的に暮らす新たな生活様式を生み出す。

2. 環境差の大きい場所に暮らす

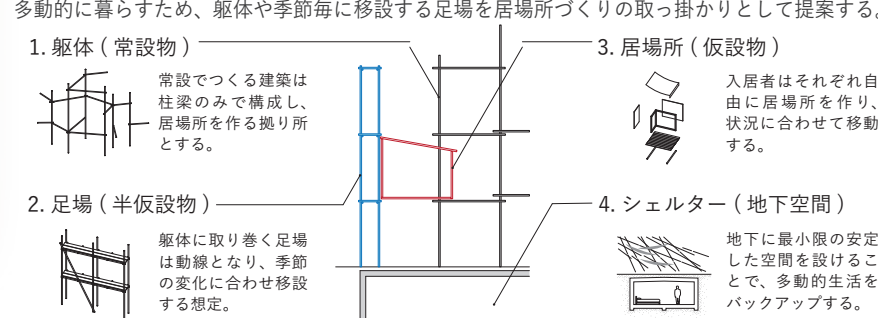


4. 多動的な暮らし × シェアハウス × 賃貸

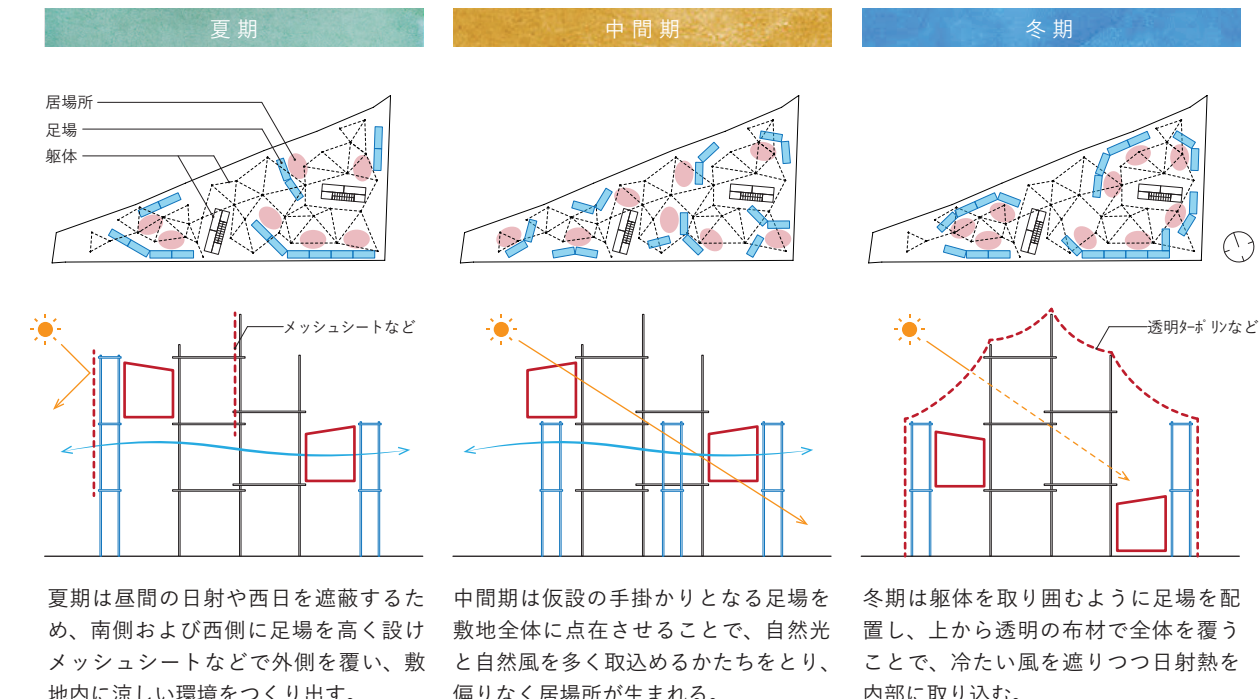


「シェアハウス」という形式は所有の境界が曖昧な本建物の構成と相まって、入居者同士のコミュニティを形成し、協力して建物全体をかたちづくる。また、「賃貸」という形式は入居者の入れ替えを生み、多動的な暮らしを支えるシステムをつくる。

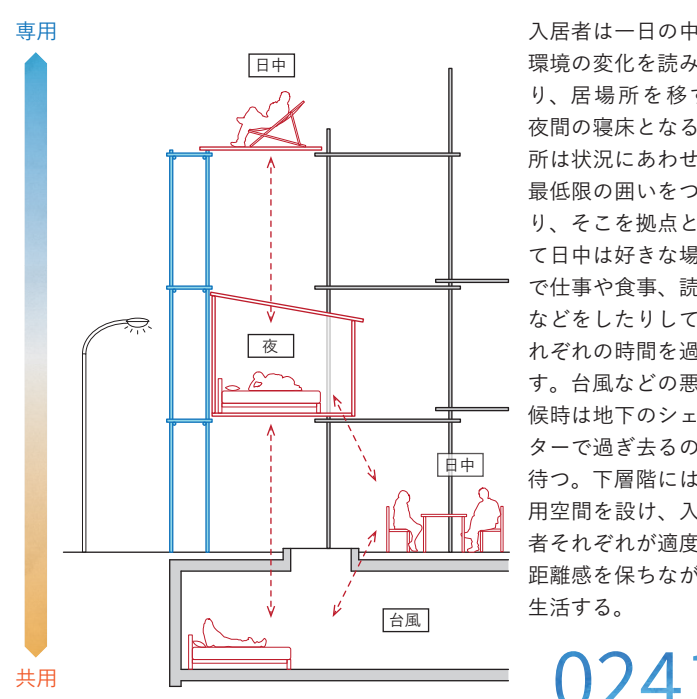
3. 多動的に暮らすための建物構成物



5. 変化に合わせてふるまのイメージ



6. 一日の中で移り変わる居場所



入居者は一日の中で環境の変化を読み取り、居場所を移す。夜間の寝床となる場所は状況にあわせた最低限の囲いをつくり、そこを拠点として日中は好きな場所で仕事や食事、読書などをしたりしてそれぞれの時間を過ごす。台風などの悪天候時は地下のシェルターで過ぎるのを待つ。下層には共用空間を設け、入居者それぞれが適度な距離感を保ちながら生活する。